

会話含意算出の為の推論過程

—グライスの推論形式に対する評価—

村 越 行 雄

要 旨

論文“Logic and Conversation”(1975)で展開されたグライスの含意理論は、会話において含意が重要な部分を成すものとして存在することを明確にし、理論化した点で高い評価を得、哲学そして言語学の分野において確固たる地位を占めることになったが、彼の方法に対する評価に関しては、意見が分かれるところである。話し手の伝達意図を聞き手が把握して初めてコミュニケーションが成立することになるが、その伝達意図の把握は、言語的意味の理解だけによって話し手の発話を直接的に理解できる場合と、含意が含まれている為、発話を推論によって解釈するしかない場合とでは異なり、とくに推論に基づく発話解釈を考える際、具体的にどのような推論形式に基づいて発話を解釈し、伝達意図を把握するかが問題となる。この点で、グライスの推論形式に対して肯定的立場を取る経験的・帰納的推論形式擁護論者と否定的立場を取る論理的・演繹的推論形式擁護論者が対立する。そして、会話の構造的解明の為に、これら対立する推論形式の検討・評価が絶対不可欠である。そこで、発話解釈の問題点、グライスの推論形式、帰納的推論形式、演繹的推論形式、帰納的推論形式と演繹的推論形式に関する評価という順序で、より確実で、より確定的な発話解釈方法になりえるのは、どちらの推論形式であるかを調べてみることにする。

Key words: H. P. Grice (H. P. グライス), inference (推論), implication (含意), utterance interpretation (発話解釈), conversation (会話)

1 はじめに

発話解釈 (utterance interpretation) に関する議論は、グライス含意理論⁽¹⁾の出現以来、発話解釈に関連する種々の側面の内⁽²⁾、とくにその一側面である会話含意 (conversational implicature) の算出過程を中心にして活発化し、著しい理論的發展が見られ、現在も進行中である。例えば、会話含意算出過程におけるグライスの推論形式に対する評価をめぐって賛否両論が出されてきているが、最近の論文、著書を見ると、肯定的立場をとる Kent Bach, Robert M. Harnish 共著の *Linguistic Communication and Speech Acts*⁽³⁾ (1979), Geoffrey N. Leech 著の *Principles of Pragmatics*⁽⁴⁾ (1983), Stephen C. Levinson 著の *Pragmatics*⁽⁵⁾ (1983), Gillian Brown, George Yule 共著の *Discourse Analysis*⁽⁶⁾ (1983) 等があるのに対して、否定的立場をとる Deirdre Wilson, Dan Sperber 共著の “Inference and implicature”⁽⁷⁾ (1986), Diane Blakemore 著の *Semantic Constraints on Relevance*⁽⁸⁾ (1987), Robyn Carston 著の “Implicature, explicature, and truth-theoretic semantics”⁽⁹⁾ (1988) 等があるが、会話含意算出の為の推論過程を前者は帰納的推論 (inductive inference) として、また後者は演繹的推論 (deductive inference) として特徴づけている点で、両者を対立する二大主流と見ることができよう。こうした最近の動向に見られる対立 (帰納的対演繹的, 経験的対論理的) は、グライスの推論形式の再評価のみならず、会話含意算出過程の再検討をも強く迫るものと言えよう。そこで、本稿では、会話含意算出過程における推論形式が帰納的であるのか、また演繹的であるのかという問題を扱うことにする。なお、グライスによると、含意は慣習的含意 (conventional implicature) と会話含意に分類され、更に後者は一般的会話含意 (generalized conversational implicature) と個別的会話含意 (particularized conversational implicature) に分類されることになるが、今回は個別的会話含意のみに対象を限定して行うことにする。

2 発話解釈の問題点

会話というものは、話し手がある事を伝達する為にある事を言い、聞き手は話し手の言う事を聞いて、話し手が自分に伝達しようとしている事を理解して初めてコミュニケーションが成立するというようなものなのである。そして、日常的な会話において、私達は相手の言う事を聞いて、相手の伝達意図を瞬時に理解して、ほとんど問題なく話しを進めていくのである。ところが、会話は全て同じ要素から成り立っているとは限らない。例えば、発話の言語的意味の理解だけで伝達意図が理解できる場合もあれば、発話の言語的意味の理解だけでは伝達意図が理解できない場合もあるのである。そこで、問題は後者である。そこには少なくとも二つの乗り越えなければならない問題点が存在し、そのことが発話解釈を複雑にさせているのである。以上の事を少し具体的に見てみることにする。

- (i) 会話成立条件が発話の言語的意味の理解だけの場合。この場合、話し手が実際に口に出して言う事と話し手が伝達しようと意図している事が同次元で扱えるものなので、つまり話し手の言う言葉の言語的意味に話し手の伝達しようと意図している事が含まれているので、聞き手は話し手の言う事を聞いて、その言葉の言語的意味が理解できれば、それで話し手が自分に何を伝達しようと意図しているのかが分かるのである。例えば、Aが友人Bに単純に学校に行く時間だけを知りたくて、「明日、何時に学校に行くんだい。」と聞いて、Bが「明日、9時に学校に行くよ。」と返答する場合、Bの発話をAは何の問題もなく理解するであろう。Bの発話の言語的意味が分かれば、Bの伝達意図もすぐにAには分かるからである。
- (ii) 会話成立条件として発話の言語的意味の理解だけでなく、発話の会話含意の理解が加わる場合。

- (a) 第一の問題点は、話し手が実際に口に出して言う事と話し手が伝達しようと意図している事が同次元で扱えないことである。それは話し手が伝達しようと意図している事が話し手の言う言葉の言語的意味の中に含まれておらず、それ以外のところにあり、その為話し手が会話上で含意しているところのものとしてあるからである。従って、聞き手は話し手の言う事を聞いて、その言葉の言語的意味が理解できても、それだけで話し手が何を自分に伝達しようと意図しているかが理解できる訳ではなく、ただ直接口に出して言われたい会話含意を理解するしかないのである。
- (b) 第二の問題点は、聞き手が話し手の心の中に実際に入り込んで、自分に何を伝達しようと意図しているのかを直接目で見る事ができないことである。直接的観察ができ、しかも重要な証拠となる話し手の言う言葉だけから判断できず、また話し手の心の中を直接見ることもできず、更に話し手の外観的要素（顔の表情、身振り手振り、声の調子など）だけからも判断できず、聞き手はこれらを判断材料の一部として状況証拠的に利用しながら、話し手が自分に何を伝達しようと意図しているのかを探り出していくしかないのである。

(a)と(b)の様な障壁が存在する為、(i)の様に、聞き手が話し手の発話をその言語的意味の理解だけによって直接的に理解できるのとは異なり、(ii)では、それらの障壁を乗り越える為に、聞き手は必要なデータに基づく推論によって話し手の発話を解釈するしかなく、そこに発話解釈の複雑さが生まれてくる原因があるのである。

(i)と同様、(ii)の簡単な例をあげておくことにする。例えば、Aが友人Bに「明日、何時に学校に行くんだい。」と聞いて、Bが「明日は従妹が家に来るんだ。」と返答する場合、Bの発話はAに対する返答になっていないように一見思える。AはBの発話の言語的意味が理解できても、それだけからBの伝達意図を理解することはできない。というのは、その言語的意味にBの伝達意図が含まれていないからである。むしろ、Bは「明日は従妹が家に来るんだ。」と言うことによ

って、「明日は従妹の相手をしなければならないので、学校には行けない。」ということをAに伝達しようとしているのであり、またAはそのことを理解するのである。つまり、Aは自分なりの推論に基づいて、Bの発話を解釈し、Bが会話上で何を含意させているのかを理解するのである。

以上の事をより明確にする為に、次の様に言い表わすことができよう。

- (i) When S (speaker) says that p to H (hearer), S literally means that p and nothing else to H.
- (ii) When S says that p to H, S, by saying that p, conversationally implicates that q to H.
- (ii)' (A particularized conversational implicature) When S says that p to H, S, by saying that p, conversationally implicates that q to H on a particular occasion in virtue of special features of the context.

(i)は前述の(i)に、(ii)は前述の(ii)にそれぞれ一致するもので、(ii)'は(ii)を個別的会話含意の場合に書き変えたものである。そして、これら(i)、(ii)、(ii)'をより具体的に理解しやすい様にする為に、前述の二例を適用すればよいであろう。例えば、(i)の場合、SにBを、HにAを、pに「明日、9時に学校に行くよ。」を入れて考え、また(ii)の場合、SにBを、HにAを、pに「明日は従妹が家に来るんだ。」を、qに「明日は従妹の相手をしなければならないので、学校には行けない。」を入れて考えれば、より明確になるであろう。

(i)の場合、例えば、Aが友人Bに単純に学校に行く時間だけを知りたくて、「明日、何時に学校に行くんだい。」と聞くとした場合、S(B)がH(A)にp(「明日、9時に学校に行くよ。」)と言う時、SがHに対して文字通りpしか意味しておらず、p以外何も意味していないならば、Hはpの言語的意味の理解だけでSの発話を理解できることになる。ところが、(ii)の場合、例えば、Aが友人Bに用事を頼みたくて学校で会いたいの、「明日、何時に学校に行くんだい。」と聞くとした場合、S(B)がH(A)にp(「明日は従妹が家に来るんだ。」)と言う時、SがHに対してpと言うことによって、p以外のq(「明日は従妹の相手をしなければならないので、学校には行けない。」)を含意しているならば、HはSがHに伝達しようと意図しているqを必要なデータを利用しながら、自らの推論に基づいて導き出さなければならない(グライスの用語を使用すれば、算出しなければならない(work out, calculate))。つまり、qはpの言語的意味に含まれているものではない為、p implicates qということにはならず、あくまでも S, by saying that p, conversationally implicates that q to H ということであり、しかもpの様に、qはSが実際に口に出して言うものではなく、またHはSの心の中を直接見るができないので、Hは自分なりの推論に基づいて、Sの発話を解釈するしかないのである。

(ii)'の場合、Sは本来種々の内容のqを含意することができるのであるが、ある特定の場で発話が行われる時、ある特定の内容のqを含意することになり、Hはある特定の場で、ある特定の

内容の q を推論によって算出しなければならないことを意味している。例えば、同様の例を使えば、S が H に「明日は従妹が家に来るんだ。」(p) と言う時、S はある場では、「明日は従妹の相手をしなければならないので、学校には行けない。」(q) を含意できるし、またある場では、「明日は従妹の相手をしなければならないので、学校には遅くなら行けるよ。」(q) を含意できるし、またある場では、「従妹が君に会いたがっているから家に来いよ。」(q) を含意できるし、またある場では、「従妹とは会いたくないので、早目に学校に行くよ。」(q) を含意できるという具合に、それぞれの場合で、ある特定化された内容の q が含意される訳で、H はこうした特定化された内容の q を自らの推論に基づいて算出しなければならないのである。

3 グライスの推論形式

(ii) と (ii)' の様な S の発話を H はどの様にして解釈していくのか、H は q をどの様にして算出していくのか、その際の H の推論過程は具体的にはどの様なものなのかという問題を扱う場合、グライスによって示された会話含意算出方法を土台にして話しを進めていく必要がある。

グライスによれば、H による会話含意算出方法の基本型は、次の様な推論形式となる。

- (a) S has said that p
- (b) there is no reason to suppose that S is not observing the maxims, or at least the CP
- (c) S could not be doing this unless S thought that q
- (d) S knows (and knows that H knows that S knows) that H can see that the supposition that S thinks that q is required
- (e) S has done nothing to stop H thinking that q
- (f) S intends H to think, or is at least willing to allow H to think, that q
- (g) and so S has implicated that q⁽¹⁰⁾

(CP は協調の原理 (Cooperative Principle) のことで、会話において、S と H は互いに一定の義務と責任を共有し、両者間の協調性がコミュニケーション成立の為の大前提となることを意味する。the maxims は会話のマキシム (conversational maxims) のことで、量、質、関連性、様式のマキシムがあり、簡単に言えば、正直に (質)、関連性を持たせて (関連性)、明確に (様式)、しかも必要な情報を十分に与える形で (量) 話すことである。⁽¹¹⁾)

H は (a) から (g) までの推論過程を通して、q に到達することになるが、この様なグライスの推論形式に対しては、評価が分かれる所である。それは (c) の q の推論と (g) の q の推論の相違に対する認識から生まれてくるものと言える。例えば、Deirdre Wilson と Dan Sperber は、"What does seem clear is that (c), in which the content of the implicature is introduced for the first time, is not directly deducible from (a-b)."⁽¹²⁾ と言い、q が初めて導入される (c) におい

て、qの内容は具体的にどの様に推論されるのかという疑問を投げかけ、qの内容は(a)と(b)から演繹的に推論されないとして批判的立場を表明する。そして、“An adequate pragmatic theory should also provide some method of recovering the content of the implicatures themselves : that is, some method of deriving not (g) but (c).”⁴³であるとして、(g)のqではなく、(c)のqの推論方法、つまりqの内容自体の算出方法を見つけ出すべきであると主張する。同様の主張は、Diane Blakemore にも見られ、更に“the ‘argument’ seems to assume that the hearer has already identified q”⁴⁴と言い、Hがすでにqの内容を分かっているということを仮定している様であると批判する。

彼らの批判の中心は、qの内容は(a), (b), (c)の推論過程によっては算出されえないこと、qの内容はすでに確定的なものとして初めから仮定されてしまっていること、従ってqの内容の算出方法((g)のqではなく、(c)のqの算出方法)を見つけ出す必要性があること等にあると言える。逆に言えば、qの内容は別にして、(a)―(g)の推論形式がqの存在の算出方法としては有効的であることを彼らが認めることになると言えるかもしれない。

いずれにせよ、qの存在指摘とqの内容把握を少なくとも便宜上区別して考えることは便利であろう。実際の会話では、勿論私達は瞬時に両者を同時的に行うのであるが、Hの推論過程を具体的に見ると、第一にqの存在指摘、第二にqの内容把握という段階的順序で推論すると考えられよう。例えば、前述の例の様に、Aが「明日、何時に学校に行くんだい。」と聞くのに対して、Bが「明日は従妹が家に来るんだ。」と言う時、Bの発話がAに対する返答（直接的であれ、間接的であれ）になっているのかどうか、含意が含まれているのかどうか分からないといけない。もしかしたら、BはAの発話を聞いておらず、別の事を考えて、関係のない事を言ったのかもしれない。どのような理由であれ、Aの質問に対して、Bが全く関係のない事を言う可能性はあるのであって、AとBの発話は、一見したところ、質問―返答の関係になっていないともとれるのである。その場合、勿論AとBの間の会話は成立していないと言える。しかし、会話が成立しているものとするならば、Aの質問に対するBの発話が間接的であれ返答になっていなければならないのであり、従ってBの発話には何かが含意されていることになり、Aは含意が含まれていることが分からないといけないのである。こうしたqの存在指摘の後、次の段階としてqの内容把握が来る。qの存在が分かって、AとBの間で会話が成立することになったとしても、qの具体的内容が分からなければ、話しは先に進まないのである。

そこで、qの存在とqの内容を区別して考えるならば、Deirdre Wilson, Dan Sperber, Diane Blakemore の批判は、グライスの会話含意算出方法をqの内容の算出方法としては否定しても、結果的にはqの存在の算出方法としては認めることになると言えるであろうし、またグライスが“The presence of a conversational implicature must be capable of being worked out ; for even if it can in fact be intuitively grasped, unless the intuition is replaceable by an

argument, the implicature (if present at all) will not count as a *conversational* implicature ; it will be a *conventional* implicature”⁴⁵ と言う時、文字通りに解釈すれば、会話含意の存在は、たとえ実際には直観的に分かるものだとしても、推論によって算出されるものでなければならないものだということになるであろう。このことはqの存在の算出方法としての意義を明示しているものと言えるのではなかろうか。ともかく、グライスの会話含意算出方法は、少なくともqの存在の算出方法として有効であると言えよう。

4 帰納的推論形式

qの内容はどの様にして推論されるのか、またグライスの会話含意算出方法にはqの内容の算出方法が全く欠落しているのか、それとも存在はするが、方法論的に違っているのかという問題は、どう処理させるべきであろうか。

論文 “Logic and Conversation” から読み取れることを簡単に要約してみると、次の様になるだろう。

- (a) S says that p, which seems that S is not observing the CP
- (b) there is no reason to suppose that S is not observing the CP
- (c) the supposition that S thinks that q is required in order to make S's saying that p consistent with the CP
- (d) So, S implicates that q

(a)―(c)は、前述の(a)―(c)に一致するものであるが、この推論形式は繰り返し使用されており、これがqの内容の算出方法と考えられる可能性を持った推論形式であると言えよう。しかし、これによってqの特定の内容がどの様にして算出されるかが明確になったとは必ずしも言えない所がある。というのは、(c)段階で、qの内容が特定化されるのであるが、それは(a)と(b)からは読み取れないからである。そこで、会話含意算出の際、Hが頼りにするデータとしてグライスがあげる “(1) the conventional meaning of the words used, together with the identity of any references that may be involved ; (2) the CP and its maxims ; (3) the context, linguistic or otherwise, of the utterance ; (4) other items of background knowledge ; and (5) the fact (or supposed fact) that all relevant items falling under the previous headings are available to both participants and both participants know or assume this to be the case”⁴⁶ を加える必要がある。このデータを(a)―(d)に組み合わせて考えてみると、Hの立場から言うと、(a)―(c)の段階を経て(c)段階で、qの存在が指摘され、その後（ほぼ同時に）、(c)段階で、必要なデータに基づく推論によってqの特定の内容が算出されることになる。ということは、(a)と(b)は、あくまでもqの存在の算出の為の前段階として位置づけられ、(c)段階で、qの存在が指摘された後、(a)と(b)からではなく、あくまでも必要なデータに基づいて、qの内容が算出されることになる。

以上の事は、前述の(a)―(g)の推論形式にも当てはめることができる。勿論、(c)―(g)のqを全て単にqが存在していることを意味するものとして解釈できようが、不自然であろうし、またグライスの意図したものでもないであろう。とするならば、(a)―(b)を通して(c)段階において、Hはqが存在することに気が付くと同時に、当然そのqが具体的にどのような内容のものなのかに関心を向け、必要なデータを利用しながら推論して、qの内容を特定化し、そして(d)からのqはそうしたqとしてあり、最終的な(g)段階において、qが存在するだけでなく、特定化された内容を持ったqであることをSが含意していることをHが理解するという具合に考えるのが自然であろう。

もしそうであるとするならば、(a)―(g)の推論形式をqの存在の算出方法として見ることは勿論できるが、qの内容の算出方法としてはどうであろうか。(c)のqにおいて、その内容が特定化され、(d)―(g)のqはすでに特定化された内容を持ったqとして存在するのであるから、(a)―(g)全体がqの内容の算出方法を表わしているとは解釈できない。むしろ、(c)段階において、前述の必要なデータに基づく推論によって、qの内容が算出されるのである。その意味で、(a)―(g)では、qの内容の算出方法は明示されていないが、qの内容の算出に関しては、(c)段階に含まれていると言える。そして、その算出方法は、(c)段階において、qの存在が指摘された後、必要なデータを利用しながら行われる経験的、帰納的推論形式のことになるであろう。従って、ある意味では、グライスの会話含意算出方法にはqの内容の算出方法が欠落していると言えるが((a)―(g)の推論形式のみを対象にして言えば)、またある意味では、存在していると言える(前述の必要なデータと(c)段階を組み合わせて考えれば)のである。そして、この点が種々の批判を生む原因ともなっているのである。

勿論、これで問題が全て解決した訳ではない。経験的、帰納的推論形式が会話含意算出方法として適当なのかどうかという問題がある。そこで、経験的、帰納的推論形式に対して、肯定的立場をとる意見を見てみることにする。

Kent Bach と Robert M. Harnish は、発話解釈の為に、Hが実際に行なう推論は極めて複雑で、しかも詳細な推論過程に対する意識もなく、瞬時に行なうのであるが、それを簡単に一般化、原則化することは難しいとし、ただ言える事は、“(the form of inference by which implicatures are worked out) is not deductive but what might be called an inference to a plausible explanation, namely, of the speaker’s utterance. In general, one good explanation is enough.”⁽¹⁷⁾ であるとしている。Gillian Brown と George Yule は、“Since the discourse analyst, like the hearer, has no direct access to a speaker’s intended meaning in producing an utterance, he often has to rely on a process of inference to arrive at an interpretation for utterances or for the connections between utterances.……It may be the case that we are capable of deriving a specific conclusion from specific premises, via deductive inference, but we are rarely asked to do so in the everyday discourse we encounter.……”

We are more likely to operate with a rather loose form of inferencing……In order to capture this type of inference, which is extremely common in our interpretation of discourse, we need a relatively loose notion of inference based on socio-cultural knowledge.”¹⁹ と言
い、また Stephen C. Levinson は, “Deductive or logical inferences are thus not defeasible.
……In contrast, inductive arguments are defeasible.……In this respect implicatures are
more like inductive inferences than they are like deductive ones, for implicatures too
are inferences easily defeasible.……they appear to be quite unlike logical inferences, and
cannot directly be modelled in terms of some semantic relation like entailment.”²⁰ と言
い、更に Geoffrey N. Leech は, “I follow Grice in believing that ‘the presence of a conversa-
tional implicature must be capable of being worked out’, by means of the type of in-
formal reasoning……I must stress, however, that in the present account all implicatures
are probabilistic. We cannot ultimately be certain of what a speaker means by an ut-
terance. The observable conditions, the utterance and the context, are determinants of
what s means by the utterance U ; it is the task of h to diagnose the most likely interpreta-
tion. Since……utterances are liable to illocutionary indeterminacy, it is not always pos-
sible for h, although a reasonable diagnostician, to come to a definite conclusion about
what s means. Interpreting an utterance is ultimately a matter of guesswork, or hypoth-
esis formation.……This is not a formalized deductive logic, but an informal rational prob-
lem-solving strategy. It consists in (a) formulating the most likely available hypoth-
esis, then (b) testing it, and, if it fails, (c) formulating the next most likely available
hypothesis, and so on.”²¹ と言う。

彼らの主張の共通点は、前述の障壁が存在する為、HはSの発話を直接的に理解できず、あくまでも間接的に、必要なデータに基づく推論によって解釈するしかなく、その為確実で、確定的な結論には到達しえないであろう（qの存在とqの内容とでは相違があり、qの存在の方がqの内容よりもより確定的に算出できると言える）という認識である。この認識に基づいて、発話解釈における推論は、論理的、演繹的推論形式としてではなく（数学的証明の様に、前提から確定的な結論を確実に導き出す様な、単純明快な推論形式としてHの実際の推論を言い表わすのは無理である為）、経験的、帰納的推論形式として特徴づけられるのであり、具体的には、“an inference to a plausible explanation” (Bach, Harnish), “a rather loose form of inferencing”, “a relatively loose notion of inference based on socio-cultural knowledge” (Brown, Yule), “quite unlike logical inferences, and cannot directly be modelled in terms of some semantic relation like entailment” (Levinson), “probabilistic”, “guesswork or hypothesis formation”, “an informal rational problem-solving strategy” (Leech) という主

張につながるのである。

勿論、論理的、演繹的に推論できず、確実で (certain)、しかも確定的な (determinate) 解釈に到達できないとして、それが同時に懐疑的にならざるを得ないという訳では決してなく、plausible (Bach, Harnish), reasonable (Brown, Yule), the most likely (Leech) な解釈に到達しえるということで少なくとも現時点では満足するしかないのかもしれないが、それはまた経験的、帰納的な推論によって、確実で、しかも確定的な解釈へ到達する為の一段階としてあるのである。これが彼らの主張の背後にあるものの様に思える。もしそうであるとすれば、賛同する点が多くあると思える。単純明快な論理形式に押し込めてしまうことは、逆に日常的会話で私達が行なっている推論形式とは掛け離れてしまう可能性がある様に思われるからである。

必要なデータに基づいて、経験的、帰納的推論によって q (とくに、 q の内容) を算出し、発話を解釈するものとした場合、必要なデータはどの様に特徴づけられるのであろうか。必要なデータとは、瞬時に入手可能な、そしてすでに入手されているデータ (障害なく、すぐに簡単に知りえるデータ、そしてすでに知っているデータ) に限定されるものであると考えるしかないであろう。というのは、例えば、ある事を判断する時、その判断に必要な判断材料としてのデータが全て、あるいは十分あるのであれば、問題はないが、現実的には、いつも必ずそうであるとは限らないからである。また、まだ入手されておらず、しかも瞬時に入手することが不可能なデータは、日常的会話では現実的に利用しえないであろうからである。つまり、推論の際、絶対不可欠な基礎としてあるデータは、個々の場において、種々の形で限定されてくるのであり、その限定されたデータを基にして推論するのが現実である。その意味で、必要なデータと言っても、あくまでも限定された枠内での必要なデータとして考えるしかないであろう。

また、データは量的側面 (データ量の豊富さ) と質的側面 (関連性の度合の強さ) の両面から見られなければならない。関連性のある、必要なデータが全て揃っていれば、推論はたやすくできるし、逆にデータ量が絶対的に不足していれば、推論不可能となるが、実際の会話では、もしデータ量が絶対的に不足している様な状況では、含意を含まず、推論の必要性のない様な発話 (言語的意味の理解だけで済む様な発話) となるであろうし、またもし関連性のある、必要なデータが全て揃う様な状況では、複雑な含意を含まず様な発話となろう。例えば、見知らぬ人との会話と非常に親しい友人との会話の相違がそれであろう。そして、見知らぬ人同志の会話を全く関係のない第三者が聞いても、容易に理解できるのに対して、親しい友人同志の会話が第三者にとって、よく内容が理解できないのもその為であろう。

データと会話含意の関係から言えば、会話を分かりやすくする為に、含意を全く含まず、データに基づく推論の必要性のない、言語的意味の理解だけで済む様な発話のやりとりにした場合、それぞれの発話は長くなり、簡単に相手の発話は理解できても、発話自体が長くなる為、時間が

それだけ多くかかることになってしまい、かえって不都合さが生まれてくることになる。また、含意を含めず、言語的意味の理解だけで済む様に、直接的に（含みを持たせずに）返答することも不都合さを生むことになる。例えば、「散歩にでも行かないか。」という友人の誘いに対して、「雨が降っているね。」「もうすぐ試験だね。」などの様な事を言うことによって、「散歩には行きたくない。」を含意させる方が、直接的に「散歩には行きたくない。」と言うよりも好意的であろう。というのも、もし「散歩には行きたくない。」と直接的な返答をされれば、その友人はかえっていろいろと考えてしまうであろう。なぜ彼は断わったのであろうか、僕のことを嫌っているのだろうか、何があったのだろうかという具合に。この様に、含意を含ませない様にするのが不都合さを生む結果になる訳で、その意味から言っても、実際の会話がいかに多くの含意を含んでいるかがはっきりするし、含意を含ませることが会話を自然にさせていることも分かるであろう。それだけに、データをいかに扱い、処理していくかが重要になってくるのである。

ともかく、ある限定された枠内という制約を受けるデータを基にして行なわれる経験的、帰納的推論のメカニズムが、実際の会話における私達の推論過程を反映させる形で解明されていけば、より確実に、より確定的に会話含意を算出し、発話を解釈する方法が明確になる可能性が大いに出てくると言えよう。

5 演繹的推論形式

少なくとも現時点では、plausible (Bach, Harnish), reasonable (Brown, Yule), the most likely (Leech) な説明で満足するしかないとする帰納的推論形式支持者に対して、より確実に、しかもより確定的な方法で会話含意を算出し、発話を解釈できると主張する演繹的推論形式支持者はどうであろうか。まず言える事は、経験的に行なう帰納的推論形式と形式論理的に（あるいは、数学的に）行なう演繹的推論形式には類似した構図が存在するということである。最初、後者について見てみることにする。

Deirdre Wilson と Dan Sperber は論文 “Inference and implicature” の中で、次の様に言う。

A proposition P is relevant in a context {C} if and only if P has at least one contextual implication in {C} ({C} stands for a set of contextual assumptions)

A contextual implication is a special type of logical implication, derived by the use of a restricted set of deductive rules which derive at most a finite set of conclusions from any finite set of premises. The contextual implications of a proposition P in a context {C} are all those conclusions deducible from the union of P with {C}, but from neither P nor {C} alone.⁽²¹⁾

the implicatures of an utterance are those contextual assumptions and implications

……We will call (contextual assumption) an implicated assumption and (contextual implication) an implicated conclusion²²⁾

Implicated assumptions are recovered by the same processes used to retrieve other contextual assumptions, with ease of accessibility playing a decisive role ; implicated conclusions are recovered by deduction.²³⁾

utterance comprehension is ultimately a matter of hypothesis formation and confirmation……because relevance is itself defined in partly deductive terms, the description of pragmatic hypothesis formation and confirmation makes essential reference to deductive processing. In particular, the class of possible implicated assumptions must be of a form capable of combining with information derived from the utterance to undergo deductive inference rules, and the class of possible implicated conclusions is itself deductively determined.²⁴⁾

以上の事から明らかな様に、Sが発話する時、Sによって含意されるものの中には、前提部分を成すもの (implicated assumption : IA) と結論部分を成すもの (implicated conclusion : IC) が存在することになる為、発話の含意は前提的含意 (前提部分を成す含意) と結論的含意 (結論部分を成す含意) から構成されることになる。そして、結論的含意 (IC) はPと前提的含意 (IA) の組み合わせから論理的に演繹されるのである。しかも、この関係は、彼らによれば、命題 (proposition) の関係として定義されるべきだとしているので、q (Sが含意する結論としての命題) がp (Sの発話の命題) とr (Sが含意する前提としての命題) の組み合わせから論理的に演繹されるということになる。彼らの具体例を見れば、より明確となろう。

(i)(A)He: Will you have some coffee?

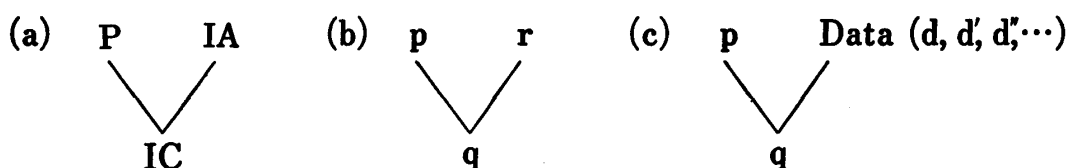
(B)She: Coffee would keep me awake. (p)

(ii) She doesn't want to be kept awake. (r)

She won't have anything that would keep her awake. (r')

(iii) She won't have any coffee. (q)²⁵⁾

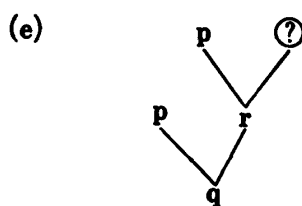
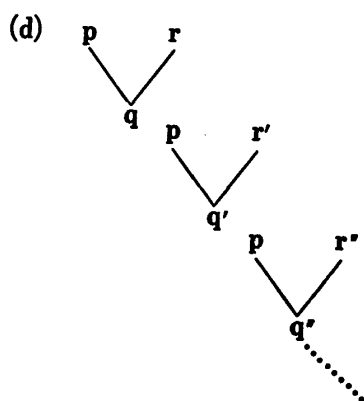
Aの質問に対して、B(S)がpと言う時、S(B)はqだけでなく、rとr'も含意するのであり、H(A)はpとrとr'からqを論理的に演繹することになる。



(b)は(a)を命題の関係として書き変えたもので、(c)は前述の経験的、帰納的推論形式によるものである。後者については、前述の様に、必要なデータに基づいて、Hはqを算出するのであるが、qの算出の際、Hは勿論Sの発話の言語的意味を理解し、その上で、pとデータを組み合わせて、経験的、帰納的にqを推論することになる。そこで、(b)と(c)を比較して明らかな事は、類似した構図が存在することである。相違点は γ とデータのところである。この相違は、発話の時、Sがqだけでなく、 γ も含意するとすべきなのか、それともSが含意するのはqだけであって、それ以外のものは推論の為のデータとすべきなのかによる。ただ、qに到達する為に必要な前提条件全てをSが自らの発話を通して含意し、Hはそれら全てを推論しえと考えるのは、現実的に言って、果して可能なのであろうか。むしろ、Sによって含意されるq以外は、あくまでもHの推論の為に必要なデータとし、そのデータの内には、Sによって含意されるものも含まれれば、そうでないものも含まれるとした方が自然ではなからうか。ともかく、(b)と(c)の構図の類似性、更に両者における推論の為の前提条件となるデータの重要性が存在すると言えよう。というのも、推論の際の前提条件となるデータが間違えていたり、不十分であれば、(b)であれ、(c)であれ、正確にqに到達することが出来なくなるからである。付け加えて言えば、(b)においては、pと γ が与えられ、しかも全て真であるならば、qは真であり、pと γ からqを導き出す論理過程は単純明快に説明されえるが、 γ が真であっても、十分に揃っていないければ、qは論理的に導き出せないか、あるいは導き出されたqは偽になってしまう。ところが、(c)においては、たとえ必要なデータが全て揃っていないなくても、それらが真であれば、私達が実際日常的に行なっている様に、真のqに到達できるし、また到達したqが偽であっても、いつでも変更可能なのである。簡単に言えば、論理的明快さに対する経験的柔軟性と言えよう。それ故、前者では、 γ が真であり、しかも必要な γ が全て揃っていないければ、全く機能しなくなるが、後者では、データが不十分であっても、真であるならば、現実的には十分機能しうるのである。勿論、 γ そしてデータが偽であれば、両者とも機能しないか、誤った機能となるが。

また、Deirdre Wilson と Dan Sperber の叙述の後半部分において、次の様な主張が述べられている。発話理解は、結局のところ、仮説設定・確認 (hypothesis formation and confirmation) の問題であるとし、仮説をたて、そして仮説を確認する際、演繹的推論が何の役割も果たしていないとする考えは誤りで、むしろ重要なかわりを持っているとしている。とくに、前提的推論については、演繹的推論を実行に移す為に、それに合わせる形で発話から導き出される情報を組み合わせていける形式にしておかなければならず、結論的推論については、それ自体演繹的に決定されるものであるとしている。この様な主張には、二つの問題点が存在している様な印象を受ける。つまり、第一の問題点は、仮説設定・確認の対象範囲を前提的推論だけでなく、結論的推論にまで広げてしまうこと、そして第二の問題点は、演繹的推論が結論的推論だけでなく、前提的推論にも適用できるという印象を受けることである。

仮説設定・確認の対象範囲が結論的推論にまで広げられるということは、発話解釈全体が仮説設定・確認の問題になることを意味し、もしそうであるならば、発話解釈全体を仮説設定・確認の問題であるとし、しかもそれを経験的、帰納的推論形式であるとする Geoffrey N. Leech の主張と同様のものになってしまう。論理的、演繹的なのか、あるいは経験的、帰納的なのかという推論形式の相違はあるが。Geoffrey N. Leech は言う、"This is not a formalized deductive logic, but an informal rational problem-solving strategy. It consists in (a) formulating the most likely available hypothesis, then (b) testing it, and if it fails, (c) formulating the next most likely available hypothesis, and so on. This kind of strategy is a general strategy employed by human beings for solving interpretative problems. It is found on the one hand in highly abstract and complex scientific theorizing, and on the other hand in homely examples, such as the following. If an electric light fails when the switch is turned on, the first and most likely hypothesis is that the bulb is broken; if the bulb is replaced, and the light still does not go on, the next most likely hypothesis is that the lights have fused, or perhaps that the connection is faulty. The process goes on until a solution (ie a hypothesis consistent with the observed facts) is found."⁴ であると。電灯の例が示す様に、最も見込みの可能性の強い仮説をたて、調べ、間違いであれば、次に最も見込みの可能性の強い仮説をたて、また調べて間違いであれば、次の仮説をたて、最終的に問題解決にたどり着くまで続けていくという具合に、仮説設定・確認によって問題解決を図る方法は、本来経験的、帰納的推論形式によるものであると言えるのではなかろうか。



このような仮説設定・確認の方法を論理的、演繹的推論形式であるとするのは、(d)の様に、最初、 p と r から論理的、演繹的推論によって q を導き出し、もし q が間違いならば、次に、 p と r' から q' を導き出し、 q' が間違いならば、更に、 p と r'' から q'' を導き出し、最終的に問題が解決されるまで、論理的、演繹的推論の繰り返しが継続していくことであると言うのであろうか。また、もし演繹的推論が結論的推論だけでなく、前提的推論にも適用すると考えるならば、(e)の様に、 p とあるものから論理的、演繹的推論によって r を導き出し、その r と p から再び論理的、演繹的推論によって q を導き出すという具合になると言うのであろうか。 q 算出の為の前提条件としての r を、全く q の算出と同様に、論理的、演繹的推論によって導き出せるのであろうか。

論理的、演繹的推論形式支持の立場から考えた場合、今述べた問題点は、 r の算出と q の算出を区別し、両者の性質上の相違から生じる推論形式の相違をより明確化することによって解消されるものと言える。例えば、 r は論理的に、演繹的に単純明快に算出されるものではなく、あくまでも仮説設定・確認の方法によって算出されるしかなく、しかもその方法は経験的、帰納的推論形式によるものであるが、それに対して、もし p と r が与えられるならば、 q は論理的、演繹的推論形式によって単純明快に導き出されるという具合に。こうした区別がより鮮明に出されているのが Robyn Carston の叙述である。つまり、*“There are two kinds of implicature involved in the derivations: implicated premises and implicated conclusions. Once the implicated premise has been recovered, the conclusion follows by a straightforward deductive inference rule, taking the implicated premise and explicature of the utterance as input. The real work lies in accounting for the recovery of the implicated premise in terms of a non-deductive process of hypothesis formation and confirmation.”*²⁰ ということ、算出される含意は二種類あり、一つは前提としての r （前提的含意: implicated premise, IP）で、もう一つは結論としての q （結論的含意: implicated conclusion, IC）であり、 r が与えられるならば、 p と r をインプットすれば、 q はすぐに単純明快な演繹的推論によって自動的に導き出されることになるので、真の仕事は、仮説設定・確認という非演繹的な過程を通して算出される r の説明にあるということである。ここで重要な事は、帰納的推論形式としての仮説設定・確認の方法による r の算出が全ての鍵を握っており、論理的、演繹的推論形式の特徴である単純明快さはそれに依存していることである。逆に言えば、 r が真でなかったり、不十分であれば、論理的、演繹的推論形式が持つ単純明快さは消え、それ故機能しなくなってしまうことになる。

Deirdre Wilson, Dan Sperber, Diane Blakemore, Robyn Carston は一致して、グライスの説明には推論の際の前提条件となる r に関するものが欠落していると指摘する。具体例を比較しながら、その批判を見てみることにする。

グライスの例：

A: I am out of petrol.

B: There is a garage round the corner.(p)

(Gloss: B would be infringing the maxim ‘Be relevant’ unless he thinks, or thinks it possible, that the garage is open, and has petrol to sell; so he implicates that the garage is, or at least may be open, etc. (q))²¹

Robyn Carston の例（グライスの例を使用）：

A: Smith doesn’t seem to have a girlfriend these days.

B: He’s been paying a lot of visits to New York lately. (p)

implicated premise: If Smith's been paying a lot of visits to New York lately he's probably got a girlfriend there. (γ)

implicated conclusion: Smith's probably got a girlfriend in New York. (q)²⁴

これら二例を比較して、重要な鍵を握る γ が第一の例で欠落していることは明らかである。そこにグライスの問題がある。しかし、それは経験的、帰納的推論形式自体の欠陥として考えるべきではなく、あくまでもグライスの推論形式に前述のデータを組み入れることによって改善されるものとして、またそう読み取られるべきものとしてあると言える。具体的には、 q の存在の算出とその算出方法については明示されているが、 q の内容の算出とその算出方法については、そしてグライスのあげるデータが q の内容の算出とその算出方法にどの様にかかわり、どの様な位置を占めているかについては、明示されていない点が問題なのであるが、すでに説明してきた様に、 p とデータから q を経験的に、帰納的に推論することは可能なのである。そう考えれば、第一の例において、 p から（詳しくは、 p と協調の原理、会話のマキシムの関係から） q が算出される様に見えるが、その背後には、 γ と同様の位置を占めるデータが介入されなければならないことを付け加えるべきである。次に、第二の例については、 p と γ から q が算出されるのであるが、 γ の内容を具体的に見ると、 γ が if p , then q の関係になっていることが分かる。ということ、(f)の様に、 p が与えられ、しかも if p , then q ならば、 q が得られるという形式論理学の形

(f) p 式 (論理学で言う Modus ponendo ponens (肯定式) のことで、「Aならば if p , then q (γ) ば B」と「A」という前提から「B」という結論が導き出されることを規定 $\therefore q$ する論理の定理) がそのまま採用されていることになる。同様の形式は、

Deirdre Wilson, Dan Sperber, Diane Blakemore にも見られるものである。例えば、Deirdre Wilson と Dan Sperber はグライスの例を次の様に説明する。

A: I am out of petrol.

B: There is a garage round the corner. (p)

implicated assumption: If there's a garage round the corner (p), I can get some petrol there (q). (γ)

implicated conclusion: I can get some petrol round the corner. (q)²⁵

ここでも同様に、 p が与えられ、しかも if p , then q ならば、 q が得られるという形式がとられている。この様な論理形式が演繹的推論形式の基本型であるとするならば、前述の Deirdre Wilson と Dan Sperber の例は、どう解釈されるべきであろうか。

(i)(A) He: Will you have some coffee?

(B) She: Coffee would keep me awake. (p)

(ii) She doesn't want to be kept awake. (γ)

She won't have anything that would keep her awake. (γ')

(iii) She won't have any coffee. (q)⁸⁰

であるとしたが、次の様に変えることができる。

(ii)' implicated premise: if coffee would keep her awake (p), she won't have any coffee (q). (r)

(iii)' implicated conclusion: She won't have any coffee. (q)

彼らによれば、(ii)の r と r' は前提的含意とされているが、そうだとすれば、(ii)'の r はどうなるのであろうか。勿論、(iii)'の r も前提的含意と考えざるをえないのであるから、むしろ(ii)の r と r' は、(iii)'の r を算出する為の前提条件として存在すると解釈すべきであり、そう解釈するしかないであろう。同様の事は、前の二例についても言えることである。(f)の様な形式論理学の形式においては、if p, then q という形式には問題ないが、それを実際の日常的会話の場面に適用して、具体的な内容を入れて考える時、p と q の間に存在する溝を埋める為の情報が必要となってくる。例えば、If Smith's been paying a lot of visits to New York lately (p) he's probably got a girlfriend there (q) の場合、なぜスミスが最近何度もニューヨークを訪れたこと (p) がニューヨークに多分恋人が出来たこと (q) につながるものであろうか。それを可能にさせる為の前提条件として (そう判断する為の判断材料として)、例えば、ニューヨークにはスミスの血縁関係の人はいないし、仕事で行く必要もないし、最近の彼の表情が明るいし、恋人がほしいと言っていたし、そしてその他の情報が必要になってくるのである。

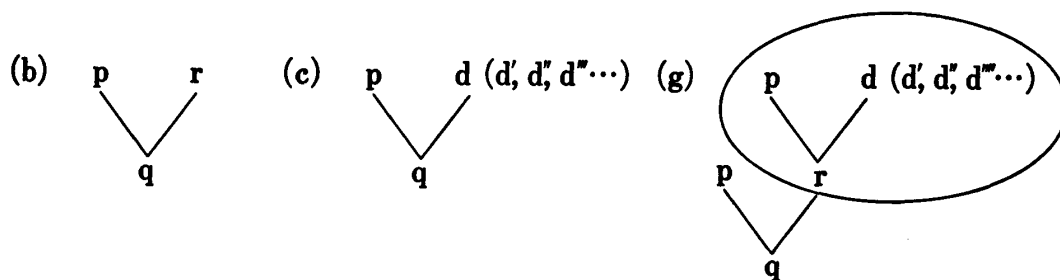
結局、 r に関しては、p と必要な情報 (すでに入手しているか、容易に入手可能な情報) から帰納的に仮説設定・確認の方法によって r を算出し、しかも演繹的に処理できる様に、(f)の様な論理形式に適合する様な形で、 r を if p, then q の形式にするのである。そして、すでに p が与えられているので、 r が if p, then q の形で与えられるならば、あとは簡単に q が論理的、演繹的推論形式 (Modus ponendo ponens) によって導き出されるのである。その意味で (とくに、後半部分に関して)、Diane Blakemore は “the only difference between the mathematical cases and the everyday ones is that whereas in mathematical proofs all the premises are made explicit, in the everyday ones some of the premises are treated as already given. Once these implicit premises have been supplied, deductive inference rules can be applied for the deduction of a conclusion in the same way that they are applied to the premises of a mathematical proof.”⁸² と言うのであろうし、“guaranteeing the accuracy of the conclusions”⁸³ と断言するのであろうと思われる。ともかく、数学的論理形式と同様の形式が日常的会話における発話の解釈で十分機能しうるかどうか、また推論によって導き出される結論の正確さが保障されるかどうかは、 r がより確実に、より確定的に算出されるかどうかにかかわっており、更に r 算出の為の前提条件としての情報が十分揃っているかどうかにかかわっているのである。ここで興味深い点は、帰納的推論形式であれ、演繹的推論形式で

あれ、前提条件としてのデータ、情報が正しく、しかも十分揃っているかどうか、より確実に、より確定的にqを推論する為の重要な鍵となっていることである。

6 帰納的推論形式と演繹的推論形式に関する評価

あくまでも私なりの解釈に基づいて、帰納的推論形式と演繹的推論形式について簡単に説明してきたが、どちらの形式がより確実で、しかも確定的な会話含意算出方法、発話解釈方法になりえるのかについて少し触れてみることにする。

両形式には、構図的に見て、類似点が存在するだけでなく、重複する部分が存在すると考えられる。



(pはSの発話を、qはSによる含意を、rは、qが結論的含意であるのに対して、Sによる前提的含意を、dはデータを示すものである。データはグライスのデータよりも広義に解釈するものとし、Wilson, Sperber 等の情報を含むものとする。)

上図に関して言えば、(c)は経験的、帰納的推論形式を、(b)は論理的、演繹的推論形式を表わす簡単な構図であり、(g)は、前述の5の説明ですでに明らかであると思うが、(b)を書き変えたものである。Sによって含意されるものがqだけでなく、rもそうであるならば、当然qとrの二つの含意をHが推論によって算出しなければならず、それ故q算出の為の推論形式だけでなく、r算出の為の推論形式も存在することになる。しかも、Robyn Carston の主張から読み取れる様に、両形式に質的相違があり、その相違が帰納的な仮説設定・確認方法(rの算出方法)と形式論理的な演繹法(qの算出方法)であるとするならば、(g)におけるr算出部分が帰納的な仮説設定・確認方法による推論形式で、q算出部分が形式論理的な演繹法による推論形式となる訳である。そして、Geoffrey Leech が主張する様に、(c)の経験的、帰納的推論形式が仮説設定・確認方法によるものであるとするならば、(b)のrの部分に(c)を組み入れて出来たのが(g)であると言えることになるのである。

具体例をあげて説明してみることにする。

A: 「今、時間があるかい。」

B: 「今日は本当に疲れたよ。」

相談したい事があるので、Aが友人Bに「今、時間があるかい。」と聞いたのであるが、Bは

「今日は本当に疲れたよ。」(p) と答えたとする。(c)の場合、H(A)はS(B)の言ったpを「Bは徹夜で試験勉強をした為、一睡もしていない。」(d), 「Bは一睡もしないと、頭が動かず、いい考えが浮ばないと言っていた。」(d'), 「試験に落第すると卒業できなくなるので、大変心配で、今はそのことだけに気を取られている。」(d'')等の様なデータに基づいて、経験的に、帰納的な仮説設定・確認の方法でSが「相談に乗る時間はない。」(q)を含意していることを推論する。(g)の場合、pを同じd, d', d''のデータに基づいて、しかも同じ方法でSが「もしBが今日、本当に疲れていたならば(p), Bには相談に乗る時間はない(q)。」(r)を含意していることをHは推論し、更にこの r (if p, then q) とpからqを形式論理的に、数学的な演繹法によって推論する。もしそうであるとするならば、(g)は、(c)段階終了後、(b)段階が付加されたものとして見る事ができる。

構図から見て、(b)の r 部分に(c)が組み入れられたものとして(g)があるならば、また推論過程から見て、(c)段階に(b)段階が付加されたものとして(g)があるならば、以下の様な事が言えよう。

第一に、(c)がかかえる問題は、同時に(g)のかかえる問題でもある為、重要な鍵を握るデータ処理の問題は共通の問題となることである。そのデータ処理の問題に関して、Kent Bach, Robert M. Harnish, Gillian Brown, George Yule, Stephen C. Levinson, Geoffrey N. Leechは、具体的な解決策を提示していないか、あるいは少なくとも十分には提示していないかの様であるが、その原因はGeoffrey N. Leechが代表的に言い表わしていること⁸⁴によるものであろう。J. R. Searleの意見⁸⁵を受け入れて、知覚の問題と同様であるとしている。例えば、高速道路にいる人が自分のそばを通り過ぎる閃光を知覚しただけで、車であると判断する時に見られる様に、不十分なデータで対象物の識別を行なうのであり、それは複雑な知覚と推論の関係を無意識の内に凝縮して、瞬時に判断を下すことで、同様の事は日常的会話にもあてはめることができるとしているのである。勿論、現実がそうであるからと言って、それだけで十分な解決策になりえるとは言いがたい。それに対して、Deirdre Wilson, Dan Sperber, Diane Blakemoreが提示する解決策は、十分解決策たりえるものであると言っていいであろう。しかし、(g)にとっての解決策は、同時に(c)にとっての解決策にもなりえるのであるから、その解決策を(c)のdの処理問題に利用すればいいことになり、従って形式から見れば、(c)と(g)のどちらにより高い評価を与えるかは断言できない。

第二に、新データの追加が(c)と(g)の両形式ではどの様に処理されるのかという問題がある。実際の会話では、会話進行過程ですでに入手しているデータに新しいデータが追加されていくのが一般的で、その新データの追加によって推論が修正・変更される場合がよくあるからである。最初に気を付けなければならない事は、論理的、演繹的推論形式支持者が経験的、帰納的推論形式支持者を批判する時、(c)の内、dが欠落しているものとして(c)を批判する傾向があり、また逆の場合、(g)ではなく、(b)として批判する傾向があることで、その上両者はdの欠落した(c)と(b)をそ

れぞれ自らの支持する形式であるとみなす傾向がある様に思われることである。そうした傾向は両者の批判の中に見られる。

Gillian Brown と George Yule は、論理的、演繹的推論形式を(b) (p と if p, then q から q を導き出す(f)の形式) とみなした上で、具体例をあげて、

- a. If it's sunny, it's warm.
- b. It's sunny.
- c. So, it's warm.⁵⁶⁾

a と b から c を論理的に導き出す形式は、新データ追加に対して対応できないとしている。同様に、Stephen C. Levinson は、異なる具体例を使用しながらも、

- i. If Socrates is a man, he is mortal.
- ii. Socrates is a man.
- iii. Therefore, Socrates is mortal.

i と ii から論理的に、演繹的に iii を導き出す形式では、新データ追加に対応できないという同じ結論に達する。それに対して、経験的、帰納的推論形式では、

- i. I have dug up 1001 carrots.
- ii. Every one of the 1001 carrots is orange.
- iii. Therefore, all carrots are orange.

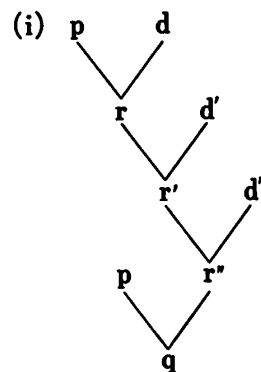
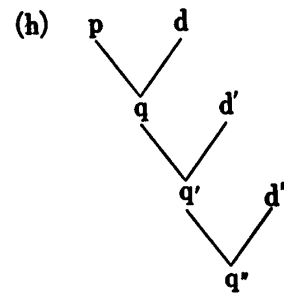
i と ii から経験的に、帰納的に iii が推論されるのであるが、もし新データ追加によって前提が追加される場合、

- i. I have dug up 1001 carrots.
- ii. Every one of the 1001 carrots is orange.
- iii. The 1002nd carrot is green.
- iv. Invalid: Therefore, all carrots are orange.⁵⁷⁾

i と ii に iii が追加されることによって結論の iv が無効になるということが可能であるとしている。つまり、(f) の様な論理的形式においては、p と if p, then q の前提が共に真であるならば、たとえどの様な前提（真であれ、偽であれ）が追加されても、q が真であることには変わらないとされているのであるが、経験的、帰納的推論形式では、ある前提から推論される結論が新しい前提の追加により無効となるのであれば、新前提に応じて別の結論を推論できるし、更に新前提が加われば、また別の結論を推論できるということが可能なのである。従って、実際の会話における q の算出には後者が最適であるということになる。以上の点に関する限り、妥当であると言える。

そこで、(c) と (g) の関係で見てみよう。実際の会話の進行状況から判断して分かる様に、新データ追加によりたえず推論の修正・変更が発生する可能性があるので、(h) の様に、p とデータ d か

ら推論される q が新データ d' の追加により q' に、また d'' の追加により q'' に修正・変更されていくものと言える。前述の例について言えば、「今、時間があるかい。」という A の質問に対して、B が「今日は本当に疲れたよ。」(p) と返答する時、H(A) はデータ d , d' , d'' に基づいて、経験的に、帰納的に「相談に乗る時間はない。」(q) が含意されていると推論するが、もし「B は友情の厚い人間である。」(d''')、「今日中に解決しなくてはならないことを B は知っている。」(d'''') 等が新データとして追加されれば、H は S が「悪いけど、余り長く相談に乗る時間はない。」(q') を含意していることを推論するということになる。これが (c) である。そして、(f) の論理形式においては、たとえどのような新データが追加されたとしても、それによって q がたえず修正・変更されるものであってはならないのである。そうであるとすれば、(b) に (c) を組み入れて出来た (g) は、(f) に (h) (この場合、 q は γ に書き換えられ、 γ は if p , then q のこととなる) を組み入れたものとしての (i) の形式になる。



では、(h) と (i) における新データ処理はどうであろうか。(h) においては、今述べた様に、帰納的な仮説設定・確認方法で推論を修正・変更しながら q から q'' へと最終的な結論に到達していくことになる。そして、(i) においても、本来 (f) の論理形式は推論の修正・変更を可能にさせるものではなく、その為新データ処理が不可能となるので、その前段階の γ 算出段階で新データを処理していくしかないのであるが、それは (h) と同様の処理となるのである。その意味で、(f) の論理形式で新データ処理が不可能であるということは、それ自体で (i) の形式の批判とはならず、むしろ γ 算出段階で扱う問題であるのであるが、ところがそれは (h) の問題でもあるということになってしまう。

第三に、重要な鍵を握るデータ処理の問題は、(c) と (g)、あるいは (h) と (i) に共通して言えることで、その問題の解決がより確実で、しかも確定的な会話含意算出方法、発話解釈方法になりえる為の絶対条件であることも共通して言えることである。別の言い方をすれば、データ処理問題の解決策が発見されれば、(g) あるいは (i) でなくても、(c) あるいは (h) だけでより確実で、しかも確定的な会話含意算出方法、発話解釈方法になりえる可能性を持つことができると言えるのではなかろうか。

では、(g) あるいは (i) において付加される (b) あるいは (f) の段階に関して、その存在意義と必要性はどこにあるのであろうか。勿論、より確実で、より確定的な方法で q の正確さを保障させる為

にあると思われる。事実、(f)の論理形式を見る限り、そう言えるのであるが、それはあくまでも r が確実に、確定的に与えられた場合のみ可能であるという条件付きである (p と if p , then $q(r)$ の前提が共に真の場合のみ q が真となる訳で、 p はすでに与えられているので、もし if p , then q が偽であれば、 q は真とはなくなってしまう)。しかし、 r の算出形式は(c)あるいは(h)と同様の形式となっているのである。更に、Gillian Brown と George Yule が “the two-sentence text, specially constructed and presented in isolation from communicative context, is not generally what the discourse analyst encounters as data, nor what the language-user encounters as a linguistic message.”⁸⁸ という様に、ほとんどの分析が二文章の関係を対象としているが、実際の会話では、長く会話が続く訳で、その会話進行状況に応じて、修正・変更された q が更に修正・変更され、そして繰り返される場合もあるのである。その場合、(h)は q'' を q''' , q'''' ……へとそのまま継続していけばよいが、(i)では、 r , r' , r'' へと修正・変更して算出された r と p から q が導き出されるが、更に新データ追加で新たに r の算出から始まり q' を導き出し、また更に初めから始めて q'' を導き出すという様に、(i)全体を繰り返して使用することになる。(f)の論理形式には新データ処理能力がない為、その処理の為、初めから始めて r を算出するしかないからである。そうであるとすれば、会話が長くなればなるほど、(h)の場合は q'' を q''' , q'''' へと単純にそのまま継続していけば済むことになるが、(i)の場合、(f)の形式に新データ処理能力がないので、初めから(i)全体を何度も繰り返して使用することになる為、全体的な視点から見れば、(h)の形式の方がより単純に見えてくるのに対して、(i)の形式はより複雑化してくる様に見えてくることになる。従って、実際の会話を反映させて考えると、Hが q を算出し、発話を解釈する時、(i)の形式では時間が長くなることになる。また、最初一見したところでは、論理的、演繹的推論形式には論理的単純明快さがあるのに対して、経験的、帰納的推論形式には経験的柔軟性（つまり、複雑さ）があると見えたが、前者を(g)あるいは(i)、後者を(c)あるいは(h)として見てみると、逆に論理的単純明快さ（(f)の論理的形式）がある為にかえって複雑化し、経験的柔軟性がある為にかえって単純化した様に思える。

検討すべき問題点は多くあるが、ここでは以上の三点のみをごく簡単に触れてみたにすぎない。従って、結論的に断定することは到底無理と言わざるを得ないが、以上述べた事から言える事は、(g)あるいは(i)における付加段階としての(b)あるいは(f)の存在意義とその必要性は、大いに疑問を残すものであると言わざるを得ないし、その付加段階によって会話含意算出方法、発話解釈方法がより確実で、しかも確定的になったとは断言できないということである。そして、(c)あるいは(h)は、実際の会話を反映させるという点で、より適した形式である様に思える。ともかく、経験的、帰納的推論形式の分析・検討を更に押し進めていく必要があるし、そのことはより確実で、しかも確定的な会話含意算出方法、発話解釈方法を探し求めていく上で重要であろう。

7 最後に

本稿では、グライスの協調の原理、会話のマキシム、また Deirdre Wilson と Dan Sperber の関連性の原理に関しては、すでに別の論文⁹⁴で検討したことがあるので今回は省略したが、少なくとも協調の原理に従っているという前提の下で検討してきた。どのような推論形式であれ、会話参加者（S と H）は少なくとも協調の原理（簡単に言えば、会話とは、本来会話参加者間の協調性に基づく協同作業の結果として生まれてくるものであって、会話参加者各人がある一定の共通の目的あるいは方向性を持って進められることを自ら受け入れることによって成立するものと言えよう）に従っているという前提の下で考えれば、重要な鍵を握るとしたデータ処理の問題もある程度ははっきりすると言えるかもしれない。つまり、発話を解釈する側の H の立場を中心に検討してきたのであるが、それに S の立場からの視点を考慮に入れば、ある限定された枠内（すでに入手しているか、あるいは瞬時に、しかも容易に入手可能なデータに限定される）にあるデータによってのみしか H は解釈できないが、S の立場から言えば、S はその限定された枠内にあるデータによって解釈できる様な発話をするとと言えるからである。そこに協調の原理の存在意義があるのである。もしそうでなければ、会話は不成立となり、H にとっては何を言っているのか全く分からなくなってしまうであろう。その点で、前述の知覚の問題とは性質を異にするものである。H だけでなく、S も会話成立の為に努力するのであるから。

その様な前提条件の下で、利点をのばし、欠点を補うか、削除することにより質的向上を図る必要があった。その意味で、q の存在の算出方法としては大いにその意義を評価すべきであるが、q の内容の算出方法としては多くの曖昧な点を残すグライスの推論形式にデータ処理問題を挿入して出来たのが(c)であり、(h)であった。(f)の論理形式に注目するあまり、その絶対的な存立条件である r の算出に関しては影をひそめてしまっている論理的、演繹的推論形式に評価すべきデータ処理方法とそれと関係する帰納的な仮説設定・確認の方法を挿入して出来たのが(g)であり、(i)であった。そして、(c)と(g)、あるいは(h)と(i)を比較して、両者の間には共通部分が存在することが発見され、しかもその共通部分とは、(c)、(h)そのものであり、それは(g)、(i)における第一段階に位置するものであった。従って、たとえどの推論形式を支持するにしても、そのことは(c)、(h)のより具体的で、詳細な分析・検討がより確実で、しかも確定的な会話含意算出方法、発話解釈方法を探り出す上での出発点となることを示していると言えるのであって、その点を明確化することが本稿の主目的であったし、その目的はある程度達成されたのではなかろうか。

<注>

- (1) H. P. Grice の含意理論は彼の論文 “Logic and Conversation,” Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts* (Academic Press, New York, 1975) pp. 41-58. の中で具体的に展開されるのであるが、その論文自体は示唆的な色合いの強いものとしてあり、彼の含意

理論の全貌が明示されているとは必ずしも言えない。

- (2) 発話解釈には、勿論言語的意味の問題も当然あるが、会話含意算出の問題だけでなく、その他にも disambiguation, reference assignment, the recovery of illocutionary force, the interpretation of figurative language 等の問題も関係してくるのであるが、本稿では、会話含意算出のみを対象とし、発話解釈の問題を会話含意算出の問題として扱うことにする。
- (3) Kent Bach and Robert M. Harnish, *Linguistic Communication and Speech Acts* (The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, 1979).
- (4) Geoffrey N. Leech, *Principles of Pragmatics* (Longman, London, 1983).
- (5) Stephen C. Levinson, *Pragmatics* (Cambridge University Press, Cambridge, 1983).
- (6) Gillian Brown and George Yule, *Discourse Analysis* (Cambridge University Press, Cambridge, 1983).
- (7) Deirdre Wilson and Dan Sperber, "Inference and implicature", Charles Travis (ed.) *Meaning and Interpretation* (Basil Blackwell, Oxford, 1986) pp. 45-75.
- (8) Diane Blakemore, *Semantic Constraints on Relevance* (Basil Blackwell, Oxford, 1987).
- (9) Robyn Carston, "Implicature, explicature, and truth-theoretic semantics", Ruth M. Kempson (ed.) *Mental Representations* (Cambridge University Press, Cambridge, 1988) pp.155-181.
- (10) H. P. Grice, *ibid.* p. 50.
- (11) H. P. Grice, *ibid.* pp. 45-46.
- (12) Deirdre Wilson and Dan Sperber, *ibid.* p. 47.
- (13) Deirdre Wilson and Dan Sperber, *ibid.* p. 48.
- (14) Diane Blakemore, *ibid.* p. 35.
- (15) H. P. Grice, *ibid.* p. 50.
- (16) H. P. Grice, *ibid.* p. 50.
- (17) Kent Bach and Robert M. Harnish, *ibid.* pp. 92-93.
- (18) Gillian Brown and George Yule, *ibid.* pp. 33-35.
- (19) Stephen C. Levinson, *ibid.* pp. 114-116.
- (20) Geoffrey N. Leech, *ibid.* pp. 30-32.
- (21) Deirdre Wilson and Dan Sperber, *ibid.* pp. 54-55.
- (22) Deirdre Wilson and Dan Sperber, *ibid.* p. 59.
- (23) Deirdre Wilson and Dan Sperber, *ibid.* p. 73.
- (24) Deirdre Wilson and Dan Sperber, *ibid.* p. 74.
- (25) Deirdre Wilson and Dan Sperber, *ibid.* pp. 48-50.
- (26) Geoffrey N. Leech, *ibid.* pp. 31-32.
- (27) Robyn Carston, *ibid.* p. 157.
- (28) H. P. Grice, *ibid.* p. 51.
- (29) Robyn Carston, *ibid.* p. 157.
- (30) Deirdre Wilson and Dan Sperber, *ibid.* p. 70.
- (31) Deirdre Wilson and Dan Sperber, *ibid.* pp. 66-68.
- (32) Diane Blakemore, *ibid.* p. 50.
- (33) Diane Blakemore, *ibid.* p. 43.
- (34) Geoffrey N. Leech, *ibid.* p. 32.
- (35) John R. Searle, "Indirect speech acts", Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts* (Academic Press, New York, 1975) p. 82.
- (36) Gillian Brown and George Yule, *ibid.* p. 34.

- ③7) Stephen C. Levinson, *ibid.* pp. 114–115.
- ③8) Gillian Brown and George Yule, *ibid.* p. 265.
- ③9) グライス含意理論に関して、詳しくは村越行雄「グライス含意理論：会話における「会話含意」と「協調の原理」の役割」(江戸川女子短期大学紀要第四号, 1989)。